

う　る　し　だ　に

漆　谷　古　墳　群

2004年3月

高　松　市　教　育　委　員　会

例　　言

1. 本書は平成元年、学校法人倉田学園(倉田キヨエ理事長[当時]・丸亀市大手町一丁目6番1号)が次項の場所で行うグラウンド造成工事に伴い、事業主体である同学園の委託をうけ高松市教育委員会が実施した発掘調査及び移転復元の報告書である。

2. 発掘調査地及び調査期間ならびに移転・復元期間は、次のとおりである。

調　　査　地　高松市新田町字大谷・同字下漆谷(同町甲 1697～1784・甲 2731～2732)

調　　査　期　間　平成元年9月8日～12月5日(10.6～11.6は協議のため調査中断)

移　　転・復　元　期　間　石室解体、石材移転・仮保管…平成2年3月12日

復元…平成4年7月13日～8月3日

3. 調査に際し、造成工事施工者である村上組・竹中組共同企業体工事事務所及び同副所長溝内享治氏に資・機材、役務提供等のご協力をいただいた。

4. 現地調査は、文化振興課文化財係長藤井雄三総括のもと、讃岐文化遺産研究会末光甲正、中西克也があたった。現地作業については、財団法人高松市シルバー人材センターからの人員派遣をうけ実施した。

5. 整理作業は、藤井総括のもと、文化財専門員山元敏裕、末光があたった。

6. 本報告書の執筆・編集は、末光が担当し、文化財専門員川畠聰が補佐した。

7. 移転復元工事は藤井総括のもと、末光があたり、村上組・竹中組共同企共体工事事務所及び高松市シルバー人材センターの協力を得て実施した。

8. 出土遺物ならびに図面・写真類は、本市教育委員会において保管している。

9. 「周辺遺跡分布図」に、国土地理院発行1/25,000地形図「高松南部」及び「志度」を使用した。

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

1. 調査前の状況	1
2. 調査の経緯と経過	1
3. 移転復元について	2

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3

第Ⅲ章　調査の概要

1. 漆谷古墳群	8
1) 漆谷1号墳	8
2) 漆谷2号墳	12
3) 漆谷3号墳	15
4) 出土遺物	17
2. 五輪塔	19

第VI章　まとめ	19
----------	----

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

1. 調査前の状況

漆谷古墳群は、高松市新田町字上漆谷(新田町甲 1785～1835)の谷間と字大谷(新田町甲 2727・乙 9～11)の尾根南斜面が境界を接した一帯に所在する。

これまで『全国遺跡地図』その他の資料には全く記録されていない(※但し『木田郡誌』に、漆谷の地名に關わり「昔、有徳長者と云ふ人ありて漆を埋む、因て號すと云ふ」「朝日さし夕日かゝやく陰のうら、黄金千壺漆千壺。其の谷の石橋の裏に此の歌有り」等記載がある)。

1988年、高松市教育委員会(文化振興課)が実施した埋蔵文化財分布調査により、はじめて五輪塔2地点、古墳側壁らしい石組1地点の存在が確認された。

1989年、学校法人倉田学園(丸亀市大手町一丁目 6 番 1 号・倉田キヨエ理事長[当時])により、新田町字大谷・同字下漆谷(新田町甲 1697～1784・同甲 2731～2732)にかけてグラウンド造成工事が進められることとなった。これに伴い本遺跡の消滅が不可避となるため、関係者の協議を経て発掘調査を実施する運びとなったものである。

*「漆谷」山田弥三吉編・香川県教育会木田部会『木田郡誌(707p)』1940

2. 調査の経緯と経過

学校法人倉田学園を事業主体として、高松市教育委員会が調査を担当することとなり、1989年9月8日に調査を開始し、同年12月5日に終了した。なお、漆谷1号墳・同2号墳の存在と遺構の概略を確認した段階で、以後の調査範囲・保存の可否等について協議を行うため、10月6日から11月6日まで現地調査を中断した。

この間の協議を通じ、後述のような移転復元による保存措置を講ずることになったものである。

調査は、第1地点(1号五輪塔周辺)、第2地点(2号五輪塔周辺)、第3地点(墓標様石材周辺)、第4地点(果樹園斜面)、第5地点(果樹園斜面)の5ヵ所にトレーナーを設定・発掘した。

第1・第2地点については、それぞれ拡張区を設けた。

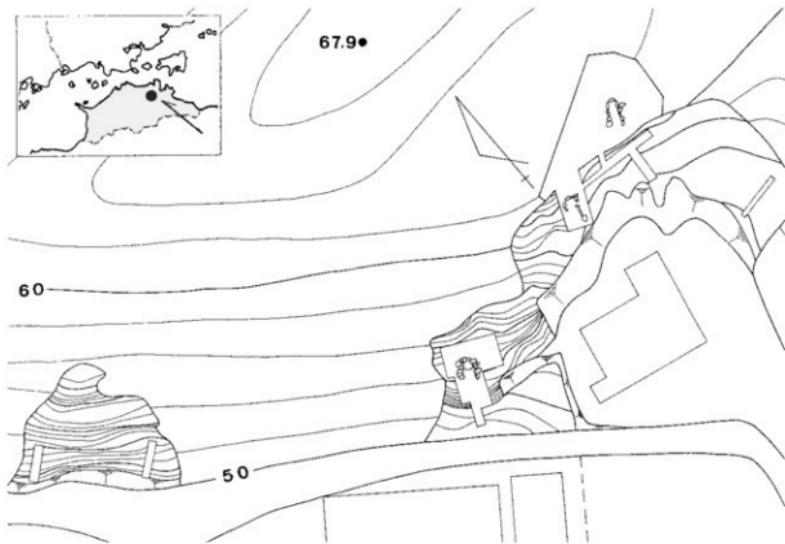
第1地点トレーナーでは、尾根斜面裾部の開墾による断面に露呈した石組が、南側に開口する横穴式石室(漆谷1号墳)の側壁であることが確認された。

第2地点トレーナーでは、石室材らしい塊石群と須恵器片が検出されたが遺構は見出だせなかつた。

しかし、同地点山側(調査予定区)で、造成工事により既に表土が掘削・再集積された周辺に、石室等の遺存が懸念されたので、立会調査として重機により集積土砂を排除したところ、天井石を失った無袖式横穴式石室(漆谷2号墳)とその墓壙掘方が検出された。

さらに、2号墳南西部(調査予定区域外)の造成工事中に、石室側壁(漆谷3号墳)が発見され、3基以上からなる漆谷古墳群の存在が明らかとなつた。

第3・4・5地点トレーナーでは、いずれも、遺構・遺物は何ら確認されなかつた。



第1図 調査位置図 (1/500)

3. 移転復元について

諸般の事情から、古墳は原位置では除去が不可避であり、現状保存は困難であった。

協議の結果、調査主体・倉田学園では、貴重な文化財であるとの認識のもと、調査終了後、同学園グラウンド敷地内に適当な用地を確保し、移築復元するとともに、同校の中学生・高校生の歴史学習等にも活用することとなった。

さしあたり、移転・復元保存についての素案を下記のように設定するとともに、調査終了後、石室の解体と石材の搬出を行った。

- 1) 移転先は、構内北東隅にあたる管理棟建築予定敷地内で、標高約60mに整地される。
- 2) 1号墳・2号墳を移設し、両者の位置関係(距離、主軸方位、床面高)は2号墳、3号墳のそれに準拠して、3号墳にあたる位置に1号墳を置く。
- 3) 2号墳は床面を露天とし、1号墳は天井石の一部(3号墳石材も充用)を架構する。

復元予定位置での管理棟建設着手時期が約2年後となる見込みであり、復元工事については、これに見合う時期に行うこととする。

石室解体と石材搬出作業は、1989年3月12日午前8時30分頃から開始。管理棟建築予定地に解体石材を集積し、同日中に終了した。

復元工事は、別項のとおり1992年7月13日～8月3日に実施した。

但し、移転・復元位置は諸般の事情から変更し、原位置に、より近接した構内南東隅に小公園風に環境設定されて、既存状況にはほぼ類似する地形・立地条件の場所に施工した。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

高松平野の東部一帯にひろがる雲付山地には、雲付山(239m)・立石山(272m)・平石山(287m)など200m以上の標高を持つ山頂が連なる。

大部分が花崗岩類から成るが、山頂部は、この岩石を貫く斑岩類や半花崗岩に近い比較的風化・侵食に対し抵抗の強い岩質である。また、北端の奥の坊付近には、山頂部に巨大な讃岐岩質安山岩の岩塊が残り、この山地が開析溶岩台地の一部であることを示している。

この山地の北麓や西麓には住宅団地が諸所に分布し、南麓や東麓にはブドウ・ミカン・モモなどの果樹園が見られた。雲付山地の山麓にある山麓台状の上位台地は、山体とあまり明瞭な境界線がない。山麓一帯、とくに南麓にはかなり広く下位台地が散在している。前田西町中塚付近にはかなり広い分布がある。

高松低地の東の部分は、春日川とその分流の新川の沖積地であり、春日川、新川が運搬した堆積物は、花崗岩類・安山岩類の小・細礫を含む砂層と粘土層の互層である。*

漆谷古墳群は、雲付山地の西寄り、平石・竜王山塊から西に派生する支脈の一つで、脆弱な花崗岩岩盤を一部露出した風化花崗岩・真砂土(まさど)からなる尾根南斜面にあり、高松市新田町字大谷にあたる斜面裾部に近く、標高50~60m付近で同町字上漆谷の谷筋に面して立地する。この谷の奥部は南東へ細長く伸び、やや傾斜がゆるんで同町字山奥となる。

谷は、西側で尾根北側の谷筋・同町字下漆谷と合流し、平野部に臨む。谷筋には最奥の山奥池から、現況で9面の溜柵用溜池が点綴している。

尾根の南側斜面は、古墳群の所在する周辺の、一部に竹藪・櫻を交えた松疎林を除いて、階段状の果樹園に開墾され、ミカン・モモ等が栽培されていたが、その後放置され荒廃していた。

*高桑 紘『香川の自然と災害－地域学への出発－』1976

2. 歴史的環境

漆谷古墳群が立地する高松平野東縁部一帯は、弥生後期の標識遺跡として著名な大空(スペリ山)遺跡、鍬形石を出土し畿内的性格が指摘されている県指定史跡・高松市茶臼山古墳、陶棺・石棚を持つ巨石墳の久本古墳はじめ、豊富な遺跡の分布が早くから注目されてきた地域である。

本遺跡南西1km余の久米池南遺跡は、弥生中期後半を中心とする高地性集落であるが、その調査時に国府型ナイフ形石器が採集されたほか、地山直上で水和層の顕著なサヌカイト片数点が認められている。

同遺跡が立地する久米山丘陵の支峰西端にあたる諏訪神社遺跡でも、類似の資料が得られている。

これまで、この地域に縄文時代の遺跡は知られていないかったが、近年、西方約4kmの大池遺跡池底で、摩耗のない大・中のサヌカイト製柳又型有舌尖頭器2点が発見され、高松平野の縄文時代草創期の一端が明らかとなつた。国道高松東道路用地では前田東・中村遺跡に後期の注口土器等が、林町・坊城遺跡に晩期の木製農耕具等が出土している。

弥生前期に入り、上記、諏訪神社遺跡で、山頂部をめぐる構から木葉文をもつ壺が出土している。林町・さこ長池遺跡等でもこの時期の出土遺物が少なくなつた。さこ長池遺跡や、大池遺跡に接した弘福寺領讃岐国山田郡田団比定地では、弥生前期までさかのぼる可能性の高い不定形小区画水田遺構が広範囲に検

出されている。

中期では、前記久米池南遺跡の鉄劍・鉄鉤・鉄斧が、国内でもっとも早い時期に属する使用例とみられている。ここでは、高床建物を線刻した絵画土器片も出土し、平(ひら)入り構造の家屋を描く点では国内初例であり注目される。

同遺跡は、比高約 20m 余の低丘陵にあるが、土器に描かれたものと同一の可能性もある高床建物を中心として、周囲に柵列跡とみられるピット列が断続的にめぐる高地性集落である。丘陵一帯と周辺の水田では、過去に多数の石鎚が採集されている。

本遺跡北東約 1km の南谷遺跡では、昭和 40 年代に前後 2 回の豪雨により、製塩土器はじめ多量の遺物が広い範囲で洗い出され、中・後期にわたる規模の大きい集落遺跡の所在が推定された。

大空(スペリ山)遺跡がこれに近く、1m²ほどの土壇から、後期前半の標識土器を一括出土している。また、その尾根に沿って大空南遺跡が伸びている。

久米池南遺跡の北側に接した久米池遺跡は、弥生土器・石器の散布が密であり、また、土師器・須恵器を伴う掘立柱建物・總柱柱穴群が確認され、さらに、備前焼片などもみられる、古代・中世を含んだ複合遺跡である。

同池の南東 300m ほど東谷池遺跡でも弥生土器・石器・須恵器片が採集される。

久米池から、久米山丘陵の鞍部を南へ越えた川添浄水場遺跡では、工事中に地表下数mで弥生終末期の壺等が数点出土している。

諏訪山にある諏訪神社移築に伴う平成 2(1990)年の調査で、本殿直下を中心に、堅穴式石室の主体部 3 基をもつ庄内併行期の墳丘墓が営まれていたことが確認されており、この内の 1 基から、壺側面を打ち欠いた皿状の「枕」が出土し、内面の頸部に接する部位に水銀朱の付着が確認された。

古墳時代以降についても、安山岩板石小口積みの畿内的な堅穴式石室を主体部とする高松市茶臼山古墳が指呼の間にある。

北方約 7km の位置に前方後円の長崎鼻古墳が所在して、近年の調査で埋葬施設に阿蘇凝灰岩製の石棺を充てたことが明らかにされた。陸繫島屋島の先端部に位置して農業生産の後背地を持たず、従来から被葬者の臨海性が指摘されていた。

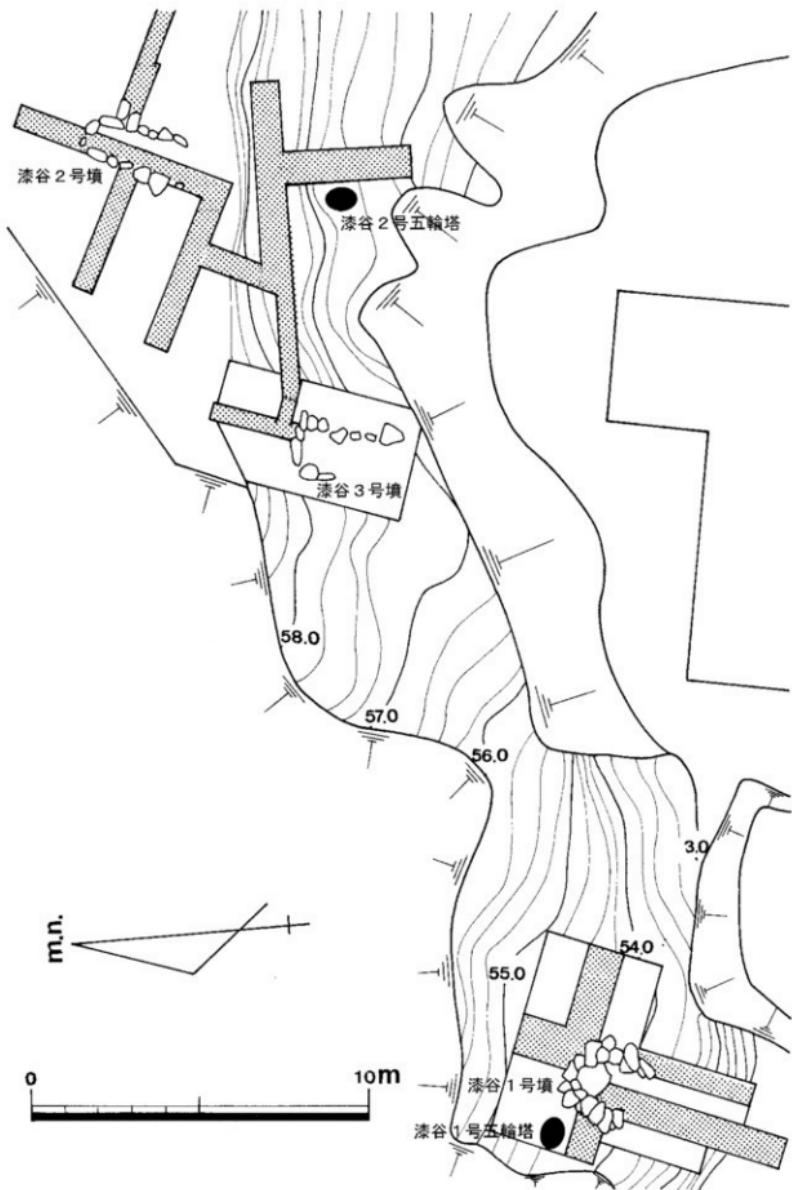
また、亀甲形陶棺で吉備との関連が注目されていた久本古墳は、極めて酷似した陶棺の類例が奈良に認められることが判明するなど、際立った個性を示すものを含め、多くの遺跡が立地している。

高松平野をめぐる地域の古墳群乃至群集墳の態様には、東部と中・西部で差異が窺われる。

本古墳群を含む東部縁辺では、数基からなる規模の小さい古墳群が点綴(北から南へ屋島・浜北、同中央、同湯の谷、同東山地、高松町・長尾、同奥の坊、東山崎・久米山、前田・金石山)している。

他方、これらと前後する時期の石清尾山古墳群(摺鉢谷、奥の池、南山浦、淨願寺山等)では、数十基のまとまりをみせて、文字通り「群集」墳として展開するのである。

後背地や生産基盤の条件、あるいは政治・社会的求心力の在り方に、かなり顕著な差が存在していたことを示唆するようである。



第2図 遺構配置図

第1表 周辺遺跡分布図地名表

No. 名 称	種類	所 在 地	摘 要
1 漆谷古墳群	古墳群	新田町大谷	漆谷 1~3 号墳、無袖式横穴式石室円墳群、移転復元保存
2 喜岡城・喜岡古墳跡	城跡・古墳	高松町永之谷	喜岡城現社城、古墳上り土器出土
3 奥ノ坊古墳	古墳跡	高松町奥ノ坊	須恵器横瓶出土、開墾で滅失(S30)
4 長尾古墳群	古墳群	高松町長尾	横穴式石室円墳群、長尾 1~3 号墳
5 大空(スベリ山)遺跡	土壇	高松町大空	土器一括、貝殻、石礫、弥生後期標識遺跡、土砂採取で滅失
6 大空南遺跡	包藏地	高松町大空	弥生・堀、壺、鉢等出土
7 南谷古墳跡	古墳	高松町福岡	須恵器横瓶出土、開墾で滅失(S30)
8 南谷遺跡	包藏地	高松町福岡	弥生・石礫、多量の製塙土器等出土、集落址
9 小山古墳跡	古墳	新田町小山	横穴式石室複室構造巨石墳、径 18m、開墾で滅失(S25)
10 石塚古墳跡	古墳	新田町石塚	周囲 40m、円筒埴輪、土器片出土、滅失
11 山下古墳	古墳	新田町山下	横穴式石室巨石墳、6世紀後半
12 山下庵寺	寺院跡	新田町山下	八葉複弁蓮華文、偏行唐草文軒瓦出土(洲崎寺藏)、山下古墳に接
13 岡山古墳群	古墳	新田町	1号前方後円(18m)・横穴式石室墳群・小古墳群、6世紀末~石棚を持つ横穴式石室巨石墳、龜甲形陶棺、承台付銅腕等出土、6世紀末、高松市指定史跡
14 久本古墳	古墳	新田町久本	2基、開墾で滅失(大正年間) 稜線上に 3 基、石材の一部残存、開墾で滅失(昭和 10)
15 丸山古墳群跡	古墳	新田町漆谷	墳丘流失、箱式石棺の一部が残存したが後に削除、滅失
16 大谷山古墳群跡	古墳	新田町漆谷	箱式石棺、滅失
17 久本山東峯古墳	古墳	新田町天神谷	弥生・土器、石器、土師器、須恵器、中世・土、陶器出土、柱穴、溝等検出
18 平石山頂古墳	古墳	高松町平石	弥生・前期溝、木葉文土器、堅穴式石室墳丘墓、箱式石棺、横穴式石室、土壤墓等、一部移転復元保存、他は滅失
19 久米池遺跡	包藏地	新田町久米	横穴式石室墳 5~7 基?、戦前に滅失
20 諏訪神社遺跡	古墳等	東山崎町久米山	弥生・堅穴式石室、圓錐形石器等出土、香川県指定史跡
21 久米八幡神社	古墳群跡	東山崎町久米山	横穴式石室 ? 宅地造成中に露出、滅失
22 久米池南遺跡	集落・墳墓	新田・東山崎町	弥生・堅穴式石室住居 10、掘立柱建物 3、各種墳墓 20~、鉄鋌、絵画土器、ナイフ形石器等出土、土砂採取で滅失
23 川添浄水場遺跡	包藏地	東山崎町川向	弥生後期末土器出土
24 茅臼山地区古墳群	古墳	新田町茅生山	無袖式横穴式石室、堅穴式石室、箱式石棺、土壤墓等 21 以上、滅失
25 高松市茶臼山古墳	古墳	東山崎前田境	前方後円墳、鍼形石等出土、香川県指定史跡
26 山線古墳群跡	古墳	新田町山線	横穴式石室 ? 宅地造成中に露出、滅失
27 北山古墳跡	古墳	新田町山線	第 1~2 主体部は粘土構、高松市茶臼山古墳に先行、土砂採取で滅失
28 滝本神社古墳	古墳	前田西町滝本	横穴式石室(T 字形)、凝灰岩切石石棺出土
29 滝本神社東古墳	古墳	前田西町滝本	1 号墳・箱式石棺、採土で滅失、2 号墳・堅穴式石室?
30 東谷池遺跡	包藏地	前田西町滝本	弥生・土器、石礫、須恵器、土師器片、砥石等出土
31 オカニやま古墳群跡	古墳	前田西町大通	堅穴式石室か? 土地造成時施朱安山岩板石、須恵器片、土器等出土、土砂採取、土地造成で滅失
32 川南西遺跡	集落址	春日町川南	中・近世集落、農耕地
33 東山崎水田遺跡	集落址	東山崎町水田	中・近世集落
34 田楽古墳	古墳	前田西町田楽	横穴式石室
35 岡崎神社遺跡	寺院跡?	前田西町岡崎	蓮華文軒丸瓦、須恵器片出土、横穴式石室墳も?
36 前田城跡	城跡	前田西町岡崎	前田氏城塞、高松市指定史跡
37 金石山古墳群	古墳	前田西町金石	1 号墳・切石組み堅穴式小石室、2 号墳他・横穴式石室
38 平尾古墳群	古墳	前田西・東町	潮満塚他横穴式石室 4、1~11 号小古墳、付近で須恵器多数出土
39 山本古墳	古墳	前田東町東畠	横穴式石室
40 宝寿寺跡	寺院跡	前田東町東畠	八葉單弁・素弁蓮華文、四重弧文軒瓦(州崎寺藏)、須恵器出土、塔基壇、礎石
41 前田東・中村遺跡	集落等	前田東町中村	平安時代掘立柱建物群、斎串、繩文後期注口土器、石棒等



第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第Ⅲ章 調査の概要

1. 漆谷古墳群

1) 1号五輪塔に接した位置に設定した第1地点トレンチ掘削の結果、墳丘状地形の裾部に見られた石組は、横穴式石室(漆谷1号墳)の側壁であることが確認された。

2) また、2号五輪塔隣接の地点に設けた第2地点トレンチでは、付近の尾根筋一帯で採取できる材質の花崗岩で、人頭大へ一辺60cmほどの塊石が、地表面下30cm前後で、斜面上方から下方にかけ、幅1m、長さ4m余の範囲に分布し、塊石の間には須恵器高杯の杯部片数点が検出されて、横穴式石室の石材が転移した可能性も考えられた。このトレンチに直交する拡張区を掘削したが、遺構は確認できなかった。

しかし、既に重機により削土後覆土ずみの当該トレンチ上方(北=山側、調査対象区域外)に横穴式石室の遺存が懸念されたので、後日、立会調査として、重機を使用して覆土を排除したところ、側壁2段以上を残す横穴式石室(漆谷2号墳)の存在が明らかとなった。

3)さらに、庵屋(旧漆谷家)除去のため1~2号墳の間を通過した重機軌道跡(調査対象予定区域外)に、花崗岩石材数個が露呈したため、周辺の覆土を排除したところ、一部石材が重機軌道により破損・移動しているものの、1/3弱が残存する横穴式石室(漆谷3号墳)の奥壁、側壁基底部石の遺存が確認された。

これにより、古墳時代終末期の無袖式横穴式石室墳3基以上からなり、小規模ながらも古墳群として形成された本遺跡の姿が明らかになった。

なお、1号墳周溝埋土やその上方(山側)で、土師器、須恵器片が散見されたことや、1号墳と2・3号墳との位置関係からみて、1号墳と3号墳との間には、さらに一基の古墳が存在した可能性が想定される。

以下、1)漆谷1号墳、2)漆谷2号墳、3)漆谷3号墳について所見の概要を述べる。

1) 漆谷1号墳(第4~6図)

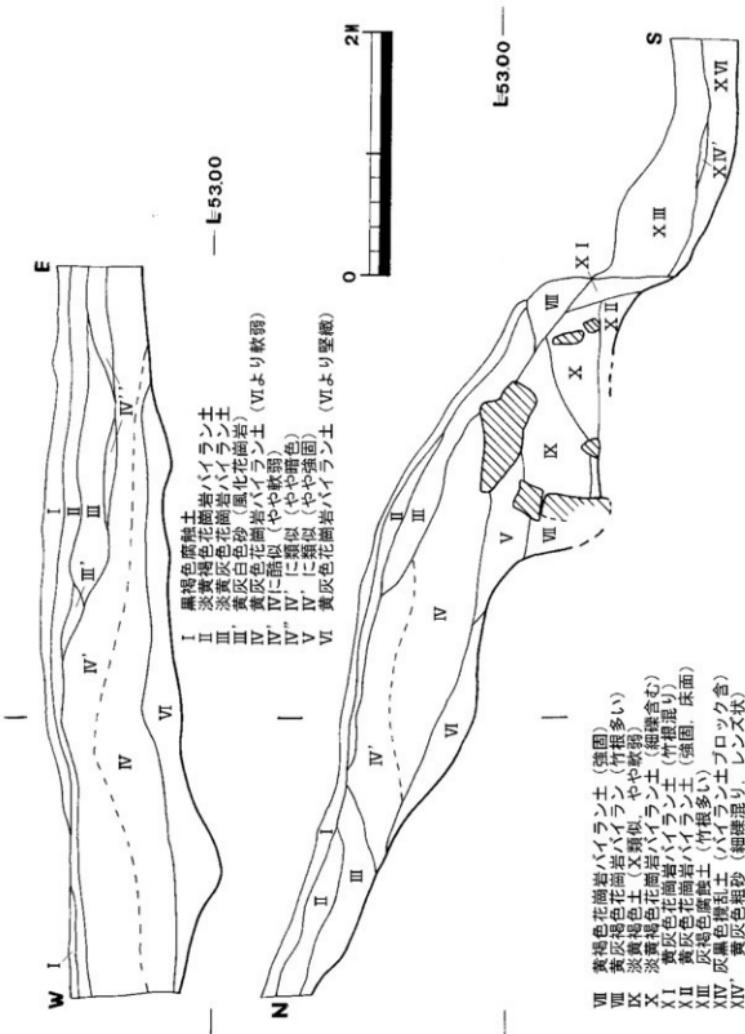
①立地 尾根の南西斜面裾部近くに、主軸方向N15°Eで、ほぼ南面して開口する。群内の西端で、群中最も低位置にある。床面の標高は、52.25mである。

②墳丘 周溝(石室両側壁外側に、櫟、松の大木があり奥壁寄りのみ検出)からみて、石室主軸方向に沿ってやや長く、楕円形を呈する径8m前後の円墳とみられる。

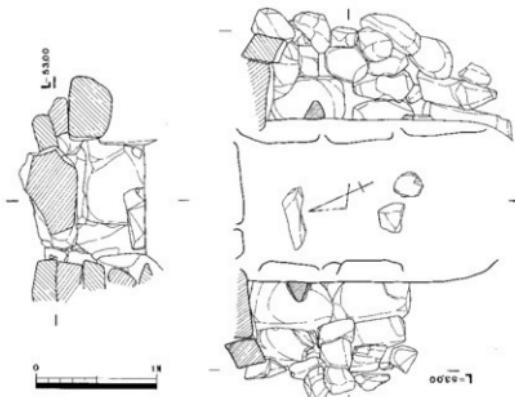
まず、斜面の山側を切って平面馬蹄形のテラス状に削り出し、さらにはN15°Eの軸を持つ墓壙を掘り下げて横穴式石室を構築し、石室外壁～墓壙間の空隙を埋め戻した後、外周に、壁材最上段付近のレベルから、深さ20~30cm、幅50~60cmほどの溝を半円形に掘り巡らしている。南側(石室開口側)は、開墾による欠損で崖状を呈しており、調査前から側壁石材が露出し、石室自体も南半部が切断され墳端は不明である。土層の状況からみて、周溝と石室奥・側壁石材の間の凹部に土を充填し、版築様に堅く叩き締めたうえ、おそらく周溝掘方の外側を裾として封土を盛り上げている。墳丘の高さは、石室床面からみて2m程度と推定される。

③内部主体 テラス状の削り出し面から幅約3.0m、長さ3.0m以上、深さ1.5m前後の長方形墓壙を掘り下げ、すべて当山地にみられる花崗岩の割石または自然石を用いて構築する。石材の形状、法量や構築方法は、2・3号墳のそれと比較して不整である。

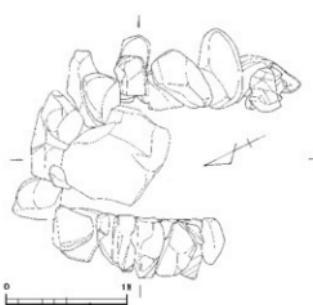
奥壁は3石から成り、向かって右側の2/3は高さ60cm×幅65cm×厚さ30cmを下段に、高さ20cm×幅70cm×厚さ30cmとの2石で横方向2段に、左側1/3は高さ80cm×幅35cm×厚さ30cmの1石を縦位置に使用し、計3石で組まれている。



第4図 漆谷1号填土層図



第5図-1 漆谷1号墳石室実測図-1



第5図-2 漆谷1号墳石室実測図-2

皆無である。墳丘の山側地山近くの埋土中で須恵器杯(平底系切)片を得ている。

⑤柱痕状遺構 ここで、周溝内外で検出された柱痕状の遺構について付言したい。

石室奥壁側の左右隅から、それぞれ約1.6mにあたる位置(2カ所)の周溝内に、径20cm×40cm、深さ30cmほどの柱穴状掘方が検出された。また周溝掘方の山側地山一帯に、径15cm前後で深さ20cm余、中心軸の方向がおおむね石室中央部上方に集中するピット状の掘り込みが多数みられた(第6図)。

埋土に遺物はなく、後者のピット群については、遺構であるのか、木の根による風化花崗岩地山の腐蝕痕等か見極め難いものもみられた。

これに類する掘り込みが墳丘内外、周溝、主体部付近で確認される諸例があり、木製樹立物の基礎部と考えられている。単独、列状、建築遺構など、形態は一様でないが、古墳をめぐる儀礼に係わる依代としての鳥形や笠形木製品の支柱、常緑樹、門柱、喪・殯屋遺構等とされる。

さらに、狭小な玄室空間に制約される終末期横穴式石室墳の遺体埋葬・葬送儀礼と石室構築法に関連し「石室下半部構築後、遺体埋葬及びそれに係る送葬儀礼が行われ、その後石室上半部の構築及び天

側壁は、基底部を高さ50cm×幅70cm×奥行50cm~高さ25cm×幅50cm×奥行50cm前後の範囲の石材を横位置の小口積みとし、計3~4段で構築する横穴式石室(おそらく無袖式)である。内法は、床面幅約1.0mで、側壁をやや持ち送り気味に築く。奥行2.0m以上、高さ約1.0mの規模である。

天井石は、奥壁寄りに方約90cmの花崗岩材1石が石室内にやや落ち込んだ状態で残存するのみで、その他は失われてい

る。

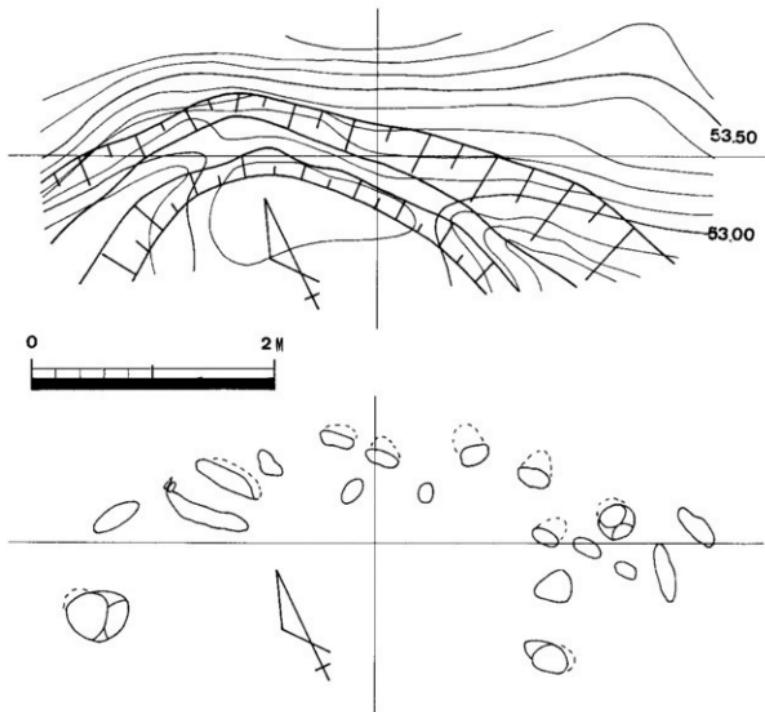
床面は、花崗土を叩き締めたのみとみられ、礫等の敷石は検出されなかつた。

床面のレベルで、棺台かと思われる塊石3個が見受けられたが、奥壁寄りの1石以外は側壁石材の転石の可能性も排除できない。石室内に排水溝はない。開口側は調査前から欠損しており閉塞石、漢道部の存否は確認できない。

④副葬品 奥壁から約1.2mで、ほぼ石室中軸線上に、床面に接して完形の土師器杯1個が内面上向きで出土した。石室規模等からして、追葬による埋納とは考え難い。埋葬時、もしくは造墓後一定期間を経ての供獻であろうか。

釘等の鉄製品の出土は認められず、その他の遺物も

皆無である。



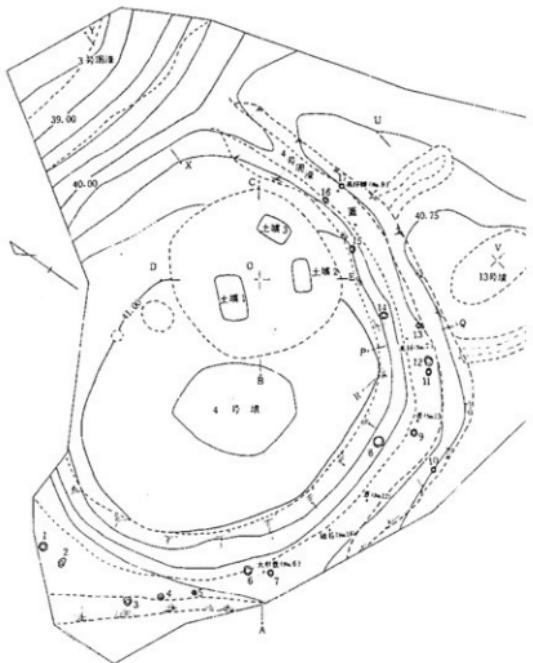
第6図 漆谷1号墳周溝・小穴位置図

井石架構がなされた」とする想定(国木健司『大原塚古墳発掘調査報告書』三野町教育委員会 1998)もみられる。

狭小な石室にあっては、羨道側からの遺体搬入が困難なため、遺体(棺)を天井石架構前に玄室に安置するとともに葬送儀礼が行われたと仮定するものである。遺体安置後、石室上半部～天井石・封土を施工し、儀礼中の成る期間、覆屋等を設けることはあり得よう。

また、墳墓に木柱をたてる例は弥生の周溝墓にまでさかのぼり、かつ長期間、広範囲に行われたことが認められる(土生田純行「古墳における儀礼の研究—木柱をめぐって—」『九州文化史研究所紀要第三十六号』九州大学九州文化史研究施設 1991)。民俗例としての「靈屋(たまや)」は、現代も遺存する。本漆谷1号墳では、周溝内で柱痕状遺構が検出されており、鳥取・佐美4号墳例(第7図)に通じる点があるが、石室奥壁隅に対応する2ヵ所の掘方については、それとはやや性格が異なるようである。

崩落等により開口部側・側壁両脇が不明であるが、本項の柱痕状遺構を、石室構築もしくはその過程における葬送儀礼等に係わる施設(墳丘を覆う上屋の支柱痕等)の遺構、又は、喪・殯屋にあたる施設の柱痕である可能性を指摘して、今後の事例に待ちたい。



(土生田純之「古墳における儀礼の研究-木柱をめぐって-』『九州文化史研究所紀要 36 号』H3.3. 所収図複写。原典・萩本勝他『佐美4・13号墳発掘調査報告書』東郷町教育委員会 1980)

第7図 佐美4号墳
(鳥取) 小穴位置図
(1/150)

2) 漆谷2号墳(第8・9・12・13図)

①立地 1号墳の東北東30m余に、3号墳を介して位置し、尾根稜線の南側斜面で傾斜が緩んだ中腹部にある。

床面標高58.5m、主軸方向N26°Eで南に開口する無袖式横穴式石室を有する。確認された3基のうち最も広い平坦部を確保しており、しかも最高所に位置する。古墳造築の立地として群中に最優位にある。

②墳丘 石室外壁に沿って、幅70cmほどで深さが基底石の底部に達する、灰褐色の極めて堅緻な土層からなる墓壙掘方が認められた。さらにその外周に、縦軸・底辺とも約10mの馬蹄形を呈する掘方が検出された。墳丘範囲が「二重墓壙」の構造を持つことを示唆している。

周溝は検出されなかつた。1・3号両墳の例から推して、上記の墓壙掘方に外接する浅い周溝の存在を想定すべきかもしれないが、開墾時もしくはグラウンド敷地造成に際して削平されたものか、本来設けられていなかつたものかは、調査時点の所見では確認できなかつた。

事前調査では墳丘の存在を示す地形は認められず、本調査の時点においても、重機削平後であつたために墳丘封土は全く失われており、墳丘の高さは不明である。

③内部主体 無袖式横穴式石室である。石材は花崗岩であり1号墳に共通するが、全体に1号墳より大振りで、割石の比率が高い。残存部内法で全長約3.2m、奥壁高1.0m弱、幅約1.0mを測る。大形石材には割石がみられ、小形のものに自然石が多い。

奥壁は、向かって右側 $2/3$ は高さ 90cm × 幅 60cm × 厚さ 25cm の 1 石を縦位置に、左側 $1/3$ は高さ 100cm × 幅 15~40cm × 厚さ 30cm の 1 石を縦位置に使用し、計 2 石で組まれている。

側壁は基底部を高さ 65~35cm × 幅 85~30cm × 奥行 90~40cm ほどの石材を、多くは小口積み、一部横口積みし、2 段目以上は、奥壁に接した両側各 1 石を高さ 25cm × 幅 90cm × 奥行 40cm ほどの石材を横口積みとして、その他は、高さ 30cm × 幅 60cm × 奥行 55cm~高さ 25cm × 幅 30cm × 奥行 40cm ほどの石材を横位置の小口積みとしながら、計 3~4 段で構築している。天井石はすべて失われている。

両側壁石材は、概して奥壁側から開口部寄りに向かって法量を減じており、奥壁側重視の思想と構築手順を推測させる。

なお、奥壁に向かって左側の、基底部奥から 5 石目は、大形石材を長径方向で石室主軸に直交させて配置する。玄室を区画する意図を見るべきであろうか。これに接した開口側の石材抜取穴底面レベルは、5 石目よりも 15~20cm 低位となる。

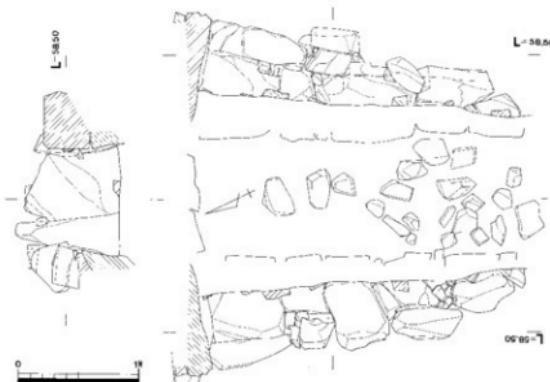
石室内床面には、拳大から長辺最大約 30cm の塊石 20 個余がみられ、棺台の存在が考えられるが、破断面が新しく、盗掘もしくは破壊を受けた際の転石らしい石材の混入も多く、断定できない。

石室内に排水溝はない。閉塞石の有無は不明である。

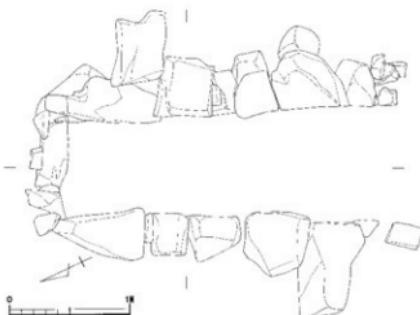
開口部に向かって右側に、人頭大を主とする塊石約 20 個のやや乱雑な集石がみられる。外護列石にあたるか否か即断できない。

なお、2 号五輪塔隣接地点に設けたトレンチにみられた塊石群は、本墳の石室材が流下したものと考えるべきであろう。

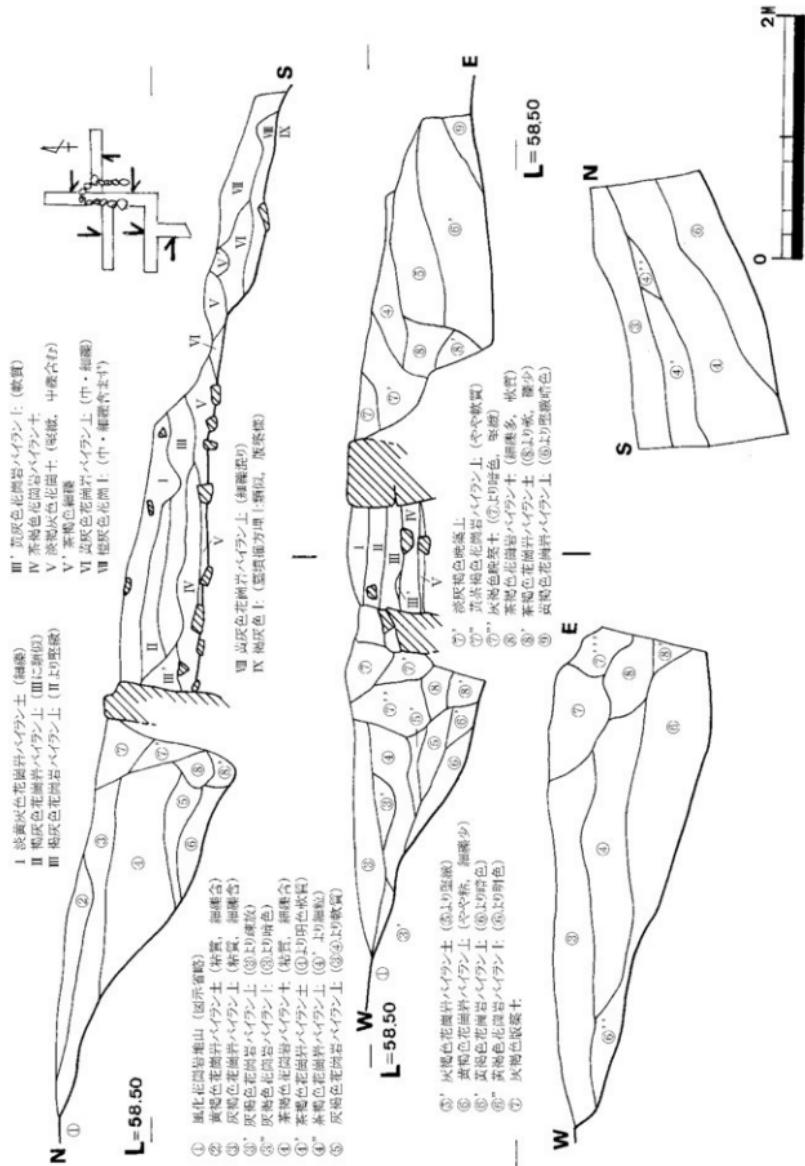
④副葬品 石室内の遺物は皆無であった。しかし、2 号五輪塔隣接地点のトレンチ内で、本墳の石室材の転移とみられる塊石群に伴って出土した須恵器高杯片は、本墳の遺物と考えて差支えなかろう。



第 8 図-1 漆谷 2 号墳石室実測図-1



第 8 図-2 漆谷 2 号墳石室実測図-2



第9図 漆谷2号墳土層図

3) 漆谷3号墳(第10~13図)

①立地 尾根筋から南西に面した斜面に、2号墳に墳裾を接し、その西南西に位置する。床面標高 56.7m、主軸方向 N22° E で南側に開口する横穴式石室を有し、石室は恐らく無袖式であろう。1号墳よりも高位置にある。

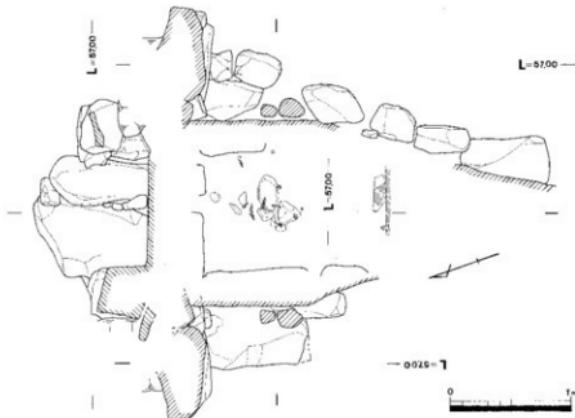
②墳丘 奥壁内面から後方(北側)へ約3.0m、奥壁に向かって右の側壁内面から東側約2.5mの範囲に、縦方向と底辺がそれぞれ約8.0m

余に復元できる馬蹄形の平面を呈した掘方が検出された(左=西側は重機により欠失)。残存部分からすれば、2号墳よりひとまわり小規模ながら「二重墓壙」の構造を持つ墳丘範囲が推定される。トレーチ断面上層から、石室石材外側約2.0mのあたりに浅い周溝の存在を想定できる。墳高は石室床面から1.2m以上、墳裾は周溝底部より数10cm外側まで封土を盛っていたものと考えられる。なお本墳の東側掘方が2号墳の封土を切っており、2号墳よりも後出である。

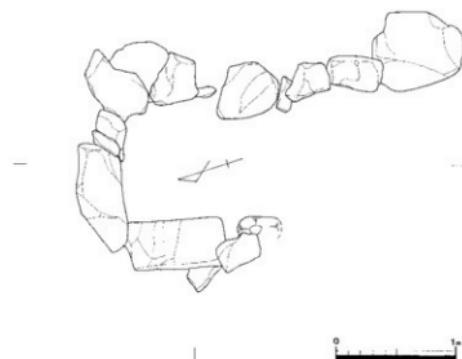
③内部主体 奥壁は、向かって右側1/3を高さ90cm×幅40cm×厚さ25cmの1石で縦位置、左側2/3を高さ100cm×幅60~90cm×厚さ40cmの1石で縦位置に使用し、計2石で組んでいる。

側壁基底部は、奥壁に向かって左側に接した高さ55cm×幅85cm×奥行40cmの1石を横口積みとして、右側を高さ35cm×幅55cm×奥行55cmほどの石材で横口積みする。向かって右側2段目は、高さ30cm×幅40cm×奥行45cmと高さ25cm×幅40cm×奥行60cmほどの石材とで横位置の小口積みとしている。その他は欠失しているが、計3~4段で構築したものと考えられる。

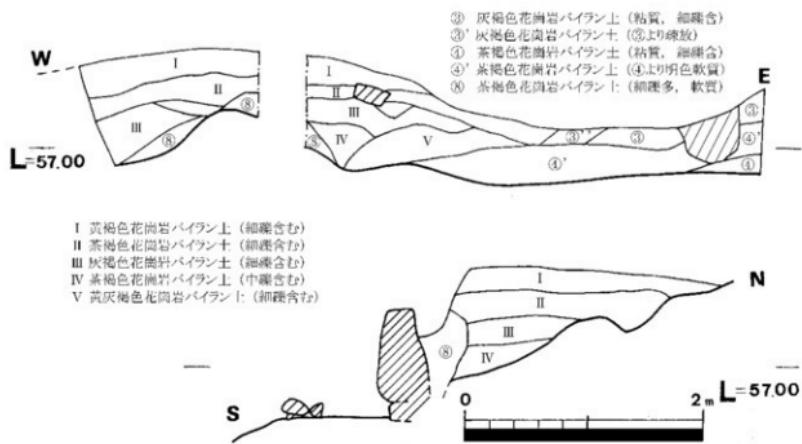
天井石はすべて失われている。石材は花崗岩であり、奥壁高1.0m弱、石室幅約1.0m、同残存長1.3mで、わずかに持送った側壁など、石室プランとともに1・2号墳と同様である。全体に1号墳よりは大振りの石



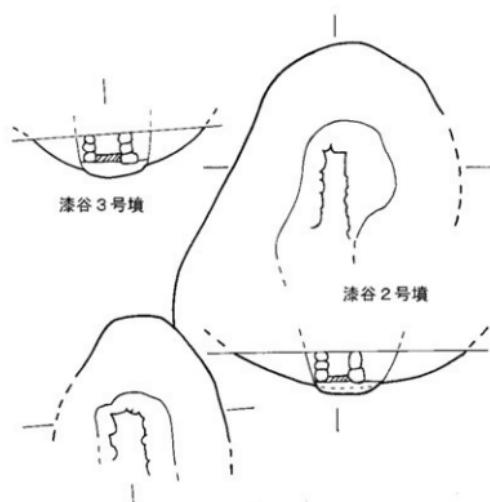
第10図-1 漆谷3号墳石室実測図-1



第10図-2 漆谷3号墳石室実測図-2



第11図 漆谷3号墳土層図

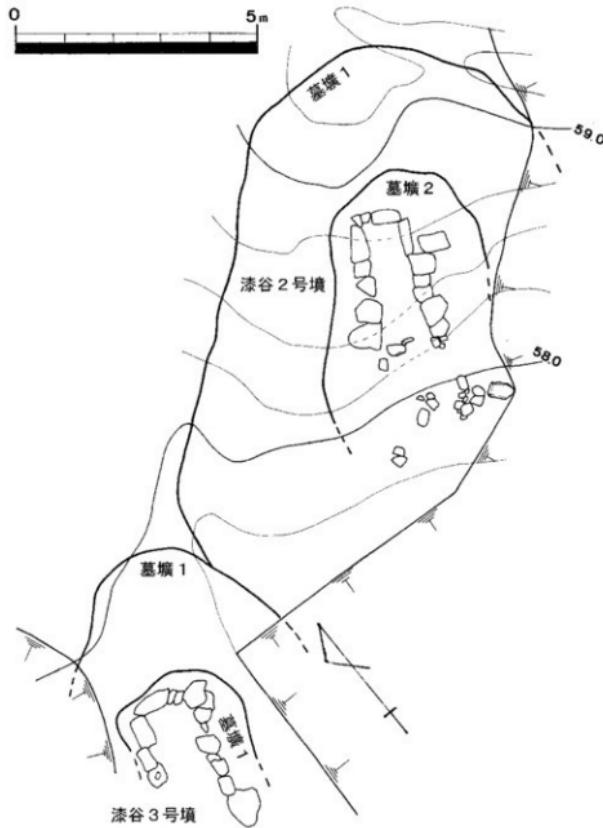


第12図 漆谷2・3号墳2重墓壙模式図

材を用い、割石、自然石を混用している。

床面に棺台らしい石材が1, 2みられる。石室内排水溝はない。なお、東側側壁に統いて、側壁基底部らしい石材数個が並ぶが、原位置を保っていない。

④副葬品 石室内床面で、11点の鉄釘(棺釘)が出土した。棺台とみられる石直上の2点を含め、奥壁に向かって右側に集中しているが、石室幅が狭小であり、2棺並列の埋葬を想定するのは困難である。他に遺物はない。



第13図 漆谷2・3号墳遺構配置（及び墓壙範囲）図

4) 出土遺物（第14図）

①漆谷1号墳

01は、土師器皿片である。底部縁辺から口縁端にかけての破片であるが反転・回転復元して原形をほぼ把握できる。復元口径は18.6cmである。

器壁は薄手で、1mm以下の砂粒を少量含むが、胎土は精選されたものである。良好な焼成である。摩耗大であり、厳密には確認できないが内外面ともヨコナデが認められる。内面に暗文が認められる。色調は橙灰色である。8世紀のものであろう。

出土位置は、羨道入口付近と推定されるが、開削・開墾部分の搅乱された残土中である。

02は、土師器杯である。先述の通り、ほぼ供獻時の原位置を保っているのではないかとみられる出土状

態で、亀裂もない完形で出土した。

分厚い器壁で焼成は良好・堅緻である。胎土に径約1~2mmの石英等の粒を含む。内面器表は粗いヘラミガキが施される。底面はヘラナデ調整、屈曲部から口縁端にかけては内外面ともヨコナデを施す。色調は暗灰橙色を呈する。底部から外傾してほぼ直線的に口縁に達し、端部で外面から内面側に丸めこみ端部内面で凹線を一周させている。

8世紀に入る時期のものと考えられる。

03は、土師器杯底部へ口縁片である。ヘラ切り平底で、底部からほぼ直線的に斜め上方へ立ち上がる。色調は暗灰橙色である。底部残存部から口縁端まで、内外面ともにヨコナデ調整である。1mm以下の砂粒を多量に含む。

出土位置は、山側の墳丘裾部封土で地山に近い凝固層内であるが、直接本墳に伴うか否かは断定できない。

01, 02とほぼ同時期のものであろう。

②漆谷 2号墳

04は、須恵器杯蓋片である。回転復元により、ほぼ原形を確認することができる。復元口径は13.5cm。上面は回転ナデ調整、外面屈曲部以下と内面は「かえり」の内・外面を含めヨコナデ調整である(但し「かえり」の先端部が消失している)。「かえり」は退化傾向が推測されるが「反転」には至っていない。

胎土は1~2mmの石英等の粒をまばらに含む。色調は、灰色を呈する。焼成は良好、堅緻である。7世紀後葉か。

出土位置は、渢道部先のトレンチ内埋土第2層である。断定できないが2号墳関連の遺物である可能性が高いと考えられる。

05は、須恵器高环坏部である。脚台部を欠くが、坏部はほぼ完存している。但し焼成がやや低火度で、焼き上がりが軟質であるため、全体に摩耗が進んでいる。色調は淡紫灰色である。胎土に1~2mmの大砂粒を多く含む。

坏部残存器高4.1cm、復元口径11.3cmである。調整は内面ヨコナデ、但し中央部はナデ。外面は脚部との境界部分をヨコナデ、口縁にかけて下半部ヘラケズリ、上半口縁側はヨコナデである。口縁端部は稜を形成しない。出土位置は、04と同じトレンチ内埋土第2層である。

04と、同時期であろう。

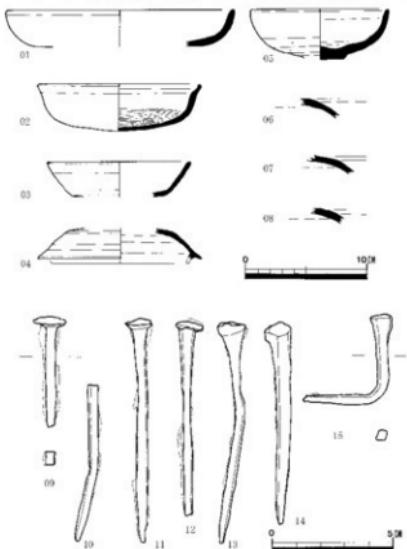
06は、須恵器杯蓋片か坏身片である。焼成良好、堅緻。色調は暗青灰色。04と同一トレンチ出土。

07は、須恵器杯蓋片か坏身片である。その他、06に同じである。

08は、須恵器杯蓋片か坏身片である。色調灰青色の他、上記2点に共通である。

③漆谷 3号墳

09~15は、鉄釘である。前述の通り重機の搅乱をうけた出土状況である。出土位置は、第10図-1に示すとおりである。原位置でない



第14図 出土遺物実測図

ものもある。棺台の可能性が高い角礫直上の出土である点などからみても「棺釘」として誤りないであろう。ただし、木片・骨片等の遺存はみられない。

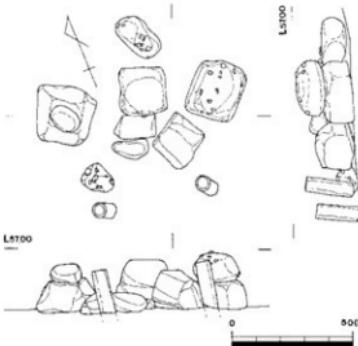
鉄釘・鉄釘片は、以下、09～15を含め11点を検出している。

2. 五輪塔

1号・2号五輪塔には、それぞれ2基分以上の石材(花崗岩・凝灰角礫岩)があるが、五輪塔として完存するものはない。1・2号とも各一对の陶製花活けを持つ。当該品は戦後の製品とみられ、比較的最近まで信仰対象であったことが知れる。ともに風・空輪を一石で彫り出すものを含むが、地・水・火輪のいずれかを欠く。付近に散在するものもある時点を集積したとみられる。

トレンチ調査で、墓壙等は確認できなかった。

1・2号五輪塔は、調査終了後、原位置から約100m 西方の造成敷地へ移転・安置された。



第15図 漆谷1号五輪塔実測図

第IV章 まとめ

周辺には遺跡の分布が万遍なく知られた中で、本遺跡の立地する尾根筋のみが空白とされてきた。漆谷1・2・3号墳＝漆谷古墳群の所在が確認されたことにより、小規模ながらも、3基以上の古墳群を造営する有力家父長層の存在と、その政治・経済・社会的基盤の形成が実証され、後期～終末期群集墳時代の地域史復元に手掛けが得られた。

1号墳は、退化したとも思われる小規模な石室が終末期古墳であることを示している。石室内出土の土師器杯は、口辺部内面に明瞭な稜をもつという特徴があるが、近近では比較の資料は未見である。胎土・焼成や他地方の類似器形例からして7世紀後半から8世紀にかけての築造と考えられる。

2号墳は、3号墳に切られているほか、立地、墳丘規模、構築法、石材法量等で1・3号墳より明らかに優越しており、これらに先行すると考えられる。2号五輪塔隣接地点のトレッヂで検出された須恵器高环片からみて、ほぼ7世紀の築造と考えられる。

3号墳については、鉄釘以外に遺物がみられないが、奥壁の構造や石材の規模・構築法など、2号墳との類似性が窺われ、1号墳と比較して、より2号墳に近接した時期の築造であると考えられる。墳丘の切合いからみて2号墳よりも後出である。

1号墳の上手一帯で、少數ながら土師器、須恵器細片がみられた。1～3号墳の間隔と2～3号墳の間隔の差をも考慮すると、1～3号墳間にも、さらに1基の古墳の存在を想定するのが、より自然である。

本古墳群内には、既に消滅したと思われるものを含め、1・2・3号墳以外の古墳の存在を考えるべきであろう。

おそらく、これらは石室規模からみて、いずれも單葬墓であり、相互の位置関係をも考慮すると、7世紀中葉から8世紀にかけて、2号墳→3号墳→(不明)→1号墳の順序で、3～4世代にわたり、同一家族体によつて造営されたものと想定したい。

古墳群域で、前後の時期に本群と系譜関係をもつ墳墓等はみられない。現時点では関連する集落・生產遺跡等は知られていないが、南側谷筋一帯（漆谷）は、現存の溜池群から推測しても古墳群の存立基盤となる程度の稲作＝農耕は可能であろうし「漆伝承」も無視できないところである。

小山～山下～久本古墳の首長統属下で、一定の成長をみたこの地の家父長層が、終末期群集墳の諸例同様に、畿内政権の影響下でみせる、数世代間の造墓活動の所産といえよう。

一方、この古墳群は、古墳時代終末期の7世紀から8世紀初頭にかけて、付近の家父長的家族共同体の家父長層が、新たにこの谷あいに臨んだ地に墓域を求め、3～4世代にわたって代々の奥城として築いたものと推定される。

2号墳→3号墳→1号墳の築造順位が想定される本古墳群は、古墳自体としても、また、群集墳としても小規模なものであるが、古墳時代終末期における在地の家父長的家族体の墳墓として、その規模・構造・築造順位・群構成等が確認できるものである。

さらには、古墳時代後期～終末期の高松平野をめぐる地域勢力の動向を探り、小山古墳～山下古墳～久本古墳等から山下庵寺の築造にいたる経緯とその意義や、屋島城（やしまのき=『日本書紀』天智天皇6年（667年）11月の条）の築城に関して考察するに際しても、その背景を語る重要な資料を提供する遺跡であるといえよう。

主要参考文献（順不同）

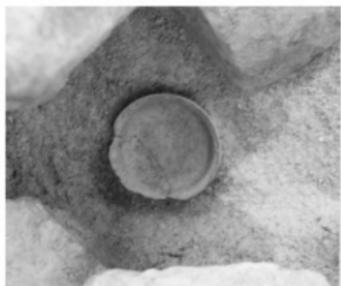
- 『石清尾山塊古墳群調査報告』高松市教育委員会 1973
『南山浦古墳群調査報告書』高松市教育委員会 1985
『高松市文化財調査報告第21集(石舟池古墳群)』高松市教育委員会 1993
『山下古墳』香川県教育委員会 1978
『香川県埋蔵文化財調査年報昭和58年度』香川県教育委員会 1984
『香川県埋蔵文化財調査年報昭和59～62年度』香川県教育委員会 1988
『香川県文化財調査報告 第10号 特集浦山古墳群調査概報』香川県教育委員会 1969
『埴穴塚発掘調査報告書』大野原町教育委員会 1985
『香川県史 第八巻 資料編 古代・中世史料』香川県 1986
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四冊財田古墳群』香川県教育委員会 1987
『大原塚古墳発掘調査報告書 香川県三野町吉津北地区圃場整備事業に伴う発掘調査』三野町教育委員会 1988
真鍋昌宏『坂出市川津町峰金山古墳』『香川考古創刊号』香川考古刊行会 1983
『雲岡古墳発掘調査報告書』豊浜町教育委員会 1987
『埋蔵文化財調査報告書』埋蔵文化財発掘調査団（丘山・高松グランドカントリー）1974
『青ノ山8号・9号墳発掘調査概報』丸亀市教育委員会 1984
『青ノ山8号・9号墳調査報告書』仁多津町教育委員会 1983
『母神山古墳群千尋支群第1.4.5.6号墳発掘調査報告書』観音寺市教育委員会 1973
『西土居古墳群』西土居古墳群発掘調査団 1983
『吉田古墳発掘調査報告書』訓田町教育委員会 1992
山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究一中・四国編一』1984
今岡文昭『終末期の円墳』『古代学研究123号-列島各地域の円墳』古代学研究会 1990
『古墳終末への一状況』『能郷遺跡群II』奈良県教育委員会 1987
土生田純之『古墳における儀礼の研究一本柱をめぐって』『九州文化史研究所紀要第三十六号』1991
小池寛『聖城区画小考』『京都府埋蔵文化財情報第38号』京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990
服部伊久男『終末期群集墳の諸相』『楓原考古学研究所論集第九』1988
『山陵町孤塚横穴群の調査』『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和59年度』奈良市教育委員会 1985



A) 漆谷古墳群全景



B) 漆谷 1 号墳（調査前）





A) 漆谷 2 号填正面



B) 同 上 面



C) 同 石室構築状況



D) 同 壁礎掘方



A) 漆谷 3 号填正面



B) 同 墓壁左侧



C) 同 上 面



D) 同 床面检出状况



A) 漆谷1号墳解体状況



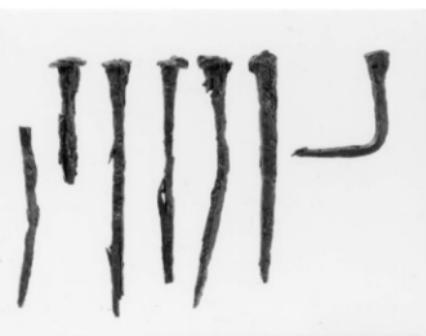
B) 同左



C) 漆谷1号五輪塔

E) ①漆谷1号墳石室は磁器
②同表道付近土師器
③漆谷2号墳南Tr埋土須志器

D) 同2号五輪塔



F) 漆谷3号墳鐵「棺」釘

報 告 書 抄 錄

ふりがな	うるしだにこふんぐん							
書名	漆谷古墳群							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ№	第75集							
編集者名	末光甲正							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 Tel 087 (839) 2636							
発行年月日	平成16年3月31日							

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ 一 ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
		市 町 村	遺 跡 №					
うるしだにこふんぐん 漆谷古墳群	たかまつし 高松市 じんせんちょう 新田町 こう 甲1697 ～1784, 2731 ～2732 ばんち 番地	37201		34° 18' 49"	134° 07' 01"	平成元年 9月8日 ～ 平成元年 12月5日	155m ²	体育施設 造 成
所取遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
漆谷古墳群	古 墳	古墳時代終末期		横六式石室 棺台 二重墓壙	土師器壺 須恵器高壺 棺鉄釘	終末期群集墳 二重墓壙		
	五輪塔	中 世		五輪塔	五輪塔塔身			

高松市埋蔵文化財調査報告第75集

うるしだにこふんぐん

漆谷古墳群

2004年3月31日

編集・発行 高松市教育委員会

高松市埋蔵文化財調査報告
第七五集

漆谷古墳群

二〇〇四年三月

高松市教育委員会